

要 旨

外国語活動の目標は、コミュニケーション能力の素地を育てることである。そこで、単元を通して、各時間に児童が自ら相手とのコミュニケーションを求めるような関わる必然性のある活動を設定した。関わりの中で、相手を知ることへの関心と、自分を表現する自信を高めさせた。すると、児童は関心と自信をあい高め、相手意識をもって友達に関わるようになり、互いのことを受け容れるようになった。そして、それを積み重ねるうちに、人と関わる楽しさを見いだし、「もっと友達のことを知りたい」「もっと自分のことを伝えたい」という関わりへの意欲を強くしていった。

<キーワード> ①関わる必然性のある活動 ②相手意識 ③人と関わる楽しさ

1 研究の目標

進んで人と関わろうとする児童を育成するために、外国語活動において、互いに相手を受け容れようとする思いが高まる指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

世界ではグローバル化の加速により、異文化との共存や国際協力の必要性が増大し、様々な分野で世界とのつながりがなくては生きていけない時代になってきた。このような背景の中で、今後、国際社会で柔軟に生きていくためには、様々な人と自ら関わり、相手を受け容れ、共存・共生していくためのコミュニケーション能力の向上が求められてくる。しかし、目の前の子どもを見ると、核家族化や少子化による異年齢のつながりの減少、習い事等による遊び時間の減少、間接的なコミュニケーション手段の急激な普及などにより、人と直接的に言葉を介して関わる機会や体験が不足している現状にある。そのためか、学校や地域社会でうまく人と関わるできない子どもが増えてきた。

外国語活動は、コミュニケーション能力の素地を育てることをその目標としている。つまり、コミュニケーションを支える、相手に心を開き、自分から関わろうとする意欲や態度を育てることをねらっているのである。児童にコミュニケーションへの積極性をもたせるためには、活動の中で人との直接の関わりをより多く体験させ、そのよさを十分に感じさせることが必要であり、それを積み重ねていくことが、先に挙げた現状の解決の一助となるのではないかと考える。

そこで本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、外国語活動において、互いを受け容れ、進んで人と関わろうとする児童の育成を目指していくこととする。児童は、活動の中で、友達と言葉を交わしたり、一緒に何かをなしたりすることで、関わる相手のことを知り、心を通わせていくことができる。そして、その楽しさをより多く味わうことができれば、児童は、周りの人により関心をもち、もっと相手のことを知りたい・自分のことも知ってほしいという思いを高めていく。それによって、自分からたくさんの人に話し掛け、進んで関わりを求めていく児童が育つのではないかと考える。

本研究を通して、互いに相手意識をもち関わりを深めていくことが、コミュニケーションへの積極性につながると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

外国語活動の各時間において、児童が自ら「聞きたい」「伝えたい」と思う必然性のある活動を設定し、相手のことを聞く・自分のことを伝える楽しさを見いださせていけば、自ら周りの人と関わろうとする意欲や態度が育つだろう。

4 研究方法

- (1) 外国語活動におけるコミュニケーションの在り方と活動内容についての理論研究
- (2) 外国語活動やコミュニケーションに関するアンケート調査を基にした児童の実態調査
- (3) 授業実践と検証・考察

5 研究内容

- (1) 小学校学習指導要領解説外国語編や“Hi, friends! 1”, “Hi, friends! 2”, 指導資料, 先行研究, その他の文献を基に情報収集や理論研究を行う。
- (2) 事前にアンケートを行い, その結果を分析し, 単元構成や活動の工夫の際の基礎資料とする。事後のアンケートと授業の様子との分析により意識や態度の変容を見る。
- (3) 所属校5年生における, “Hi, friends! 1” Lesson 8「夢の時間割を作ろう」, “Hi, friends! 2” Lesson 8「夢宣言をしよう」において, それぞれ3時間ずつの授業実践を行い, 仮説を検証し, 手立ての有効性を示す。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

ア 心の動きについて

吉村は, 「英語を上手に話せるかどうかより, 『この人と話したい』『この人のことをもっと知りたい』『私のことを伝えたい』という気持ちを持つほうが重要なのです」¹⁾と述べている。

金森は, 「何か自己実現するときは, まず心の動きがあるはずです。大切なのは『心の動き』ではないでしょうか。伝えたい気持ちがあれば, 伝える努力をするものです」²⁾と述べている。

イ 表現することについて

金森は, 「コミュニケーションにおいて相手を意識することが大切だと述べましたが, 最も大切なのは相手の話を傾聴することです。話し手を受け止め, しっかりと耳を傾けて, 反応しながら積極的に『聞く』態度こそ, コミュニケーションで最も大切な姿勢と言えるでしょう。注意深く聞くからこそ, 反応が生まれ, 自分の表現につながっていくのです」³⁾と述べている。

これらを受けて, 児童が「もっと知りたい」「もっと伝えたい」という心の動きが起こるような内容を仕組んだ単元構成をすることが必要だと考えた。

- (2) 児童の実態把握

事前に行ったアンケートによると, 「友達のことを知りたい」の問いについて「とても思う」児童は55%(17名), 「思う」児童は16%(5名), また, 「英語やジェスチャーで自分の言いたいことを伝えることができる」の問いに対して「とても思う」児童は13%(3名), 「思う」児童は20%(6名)であった。これらの結果から, 相手を知ることに関心が少ない児童や言語・非言語による表現にあまり自信がない児童が多い傾向にあるということが分かった。

- (3) 単元の構想について

単元を通して, 友達と関わる必然性のある活動, つまり, 「知りたい」「聞きたい」「伝えたい」という自らの心の動きに支えられた関わりが生じる活動を設定する。ここでポイントになるのが, それぞれの活動の中に, 児童の心を動かすことができる内容を仕組むことである。「友達のことを知りたい」という関心がわかれば, 児童の気持ちは相手に向かい, 「その人のことを知りたい」と思っ
て聞こうとし, 自分のことも積極的に表現していく。この関心と自信を段階的にあい高めることで, 外国語活動ならではの人との関わり
の楽しさを見いだし, コミュニケーションへの意欲や態度が変容するのではないかと考えた。

本研究では、最も身近な異文化をもつ人である友達を関わりの主な対象とした。相手を知ることへの関心を高めるために、まず自分と友達の相違点や類似点を見付けることができるような内容を仕組んだ。そして、次第に互いのよさに気付いたり、新しい発見があったりするような内容を意図的に仕組んでいった。その中で、徐々に表面的な所から内面へと目が向くようにし、相手を知ることへの関心を高めていくことをねらった。

また、自分のことを表現する自信を高めるためには、児童が、単元を通して自然に音声やジェスチャー等に慣れ親しみ、

「聞いて分かった」「伝わった」という、自分の表現の広がりを感じさせ、成功体験を味わわせることが大切だと考えた。そのために、聞くことが中心となる活動から伝えることが中心となる活動へと移行するような単元構成をし、児童が活動を行う度に自らもっと聞いてみたい、もっと伝えたいと思えるようにしていった。この2つが1時間の授業毎、また、単元の中で相互に関連するように構成し、相手を知ることへの関心と自分を表現する自信を段階的にあい高めることで、人と関わる楽しさを見いださせていこうと考えた(図1)。

更に、この単元構成をより有効なものにするために、各時間の振り返りでは、活動を通して得た自分や友達への気づきを、「友達の頑張り」「表現方法の工夫」「新しい発見」などの観点をもって発表させ、共有させていくことで、互いを認める場をつくり、相手に受け容れられるよさを感じさせるようにした。

(4) 授業の実際と考察

ア 児童の様相と考察

(ア) 自分を表現する自信の高まりについて

まず、児童が自信をもってコミュニケーションができるように、絵やジェスチャーなどと対応させながら英語表現を聞かせたり、教師とALTが言語や非言語でのやり取りを見せたり、チャンツやゲームなどを通して英語を口にさせたりした。楽しい活動の中で自然に言語、非言語表現に慣れ親しませていった。このようにしたことで、児童は「聞いて分かった」「見て分かった」「言えた」と徐々に表現することについて自信を付けていった。

そして、徐々に高まっていく自信を生かしていけるような活動を、段階を意識して設定した。そのような単元構成をしたことによって、児童は活動の中で、「友達のことを知りたい」「自分のことを伝えたい」と意欲的に友達に関わっていった。

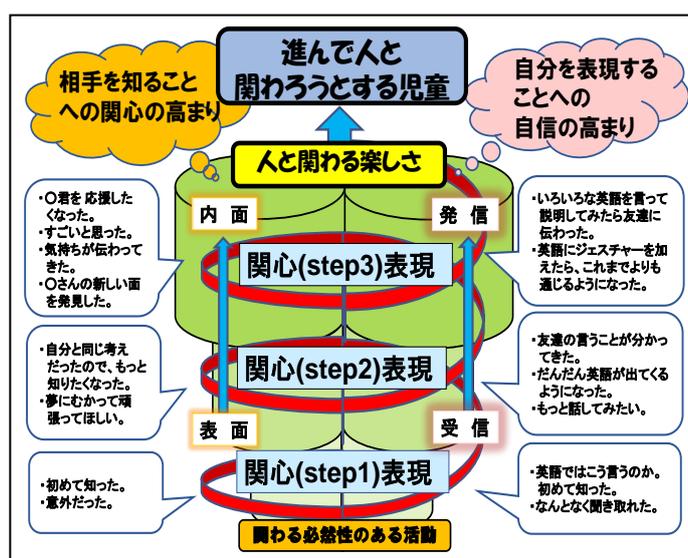


図1 単元の構想

表1 児童の振り返りカードの記述

1時目	2時目	3時目	4時目
<ul style="list-style-type: none"> 英語を聞いて分かった。 ジェスチャーを見ていると分かってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語とジェスチャーを混ぜながら伝えた。 絵にかいたり、写真を見せたりしたら伝わった。 ゆっくり話したら伝わった。 	<ul style="list-style-type: none"> 筆とか道具を使ってジェスチャーをすると、友達がすぐにうなずいた。 ジェスチャーを大きくしたり、自分が動いたりしたら伝わった。 	<ul style="list-style-type: none"> 知っている英語をたくさん言ったり、指をさしてみたり、友達が分かるまでいろいろ試した。 友達が一生懸命に答えてくれたので、その答えに付け加えて言ったら伝わった。

児童は、活動の中で異言語を介するからこそ、自分のことを伝えるために、様々な工夫をしていった。関わりの中で相手意識をもち、どのよう

にしたら相手に伝わるかを考え、そして、友達に伝えるための工夫を行い、「伝わった」という成功体験の中から1つ1つ表現方法を見いだして広げていった(前頁表1)。これもやはり単元の始めに聞くことを大事にして、その中で様々な言語・非言語の表現を体験していたからだと考える。振り返りカードの内容を分析すると、「自分のことが伝わった」「友達のいうことが分かった」というような記述が、授業が進むにつれ増えている。段階的に自分のことを表現する自信を高めていった結果、「聞きたい」「伝えたい」という思いが高まり、それを自分なりの表現で伝えることができたことで自信を高め、それが記述に反映したと考える(表2)。また、その関わりによる「友達に分かってもらえた」という自分を受け容れてもらう体験が「友達が伝えていることを聞こう」という相手を受け容れる態度へつながっていったことも児童の振り返りカードから読み取ることができる。

このように、聞くことが中心となる活動から伝えることが中心となる活動へと段階的に移行するような単元構成をしたことで、児童は表現することへの自信を徐々に高め(表3)、関わりの楽しさを見いだしていった。

(イ) 相手を知ることへの関心の高まりについて

まず、自分のあこがれの仕事についてジェスチャーやカード3択クイズで問題を出し合わせた。児童は、友達の意外性や共通性に気付き、相手を知ることへの関心を高めた。そして、なぜその仕事にあこがれているのか(2時目)、その仕事についたらどんなことをしてみたいのか(3時目)と、より友達の内面にせまる発見ができるような内容を単元に仕組んだ。児童は、友達がなぜあこがれているのかという理由などを知る中で、親への思いや将来に向かって抱いている強い願いなどに触れたことが、児童の振り返り

カードの記述から読み取ることができる(表4)。このようなことをきっかけに、児童はもっと友達のことを知ろうと“Why?”と理由を聞きながら更に積極的に相手に関わっていった。4時目は、全員のあこがれの職業をクイズにして、この中で将来に向かっての努力目標を全体に伝

えさせた。児童は活動を通して、今までにない友達の姿を発見したり、互いの思いを共有したりしたことで、友達に共感する気持ちが生じ、関わりの中で応援メッセージを伝えるようになった。相手を知ること、互いに親近感をもったり、見方や考え方を変えていったりしたからだと考える。児童の多くは、「応援してもらえてうれしい。」「思ってもいない人から応援された。」「お礼の言葉が返ってきたからうれしい。」等、相手から受け容れられるよさを感じられるような記述をしていた。

表2 振り返りカードの記述内容の割合の変化

	1時目	2時目	3時目	4時目
・自分のことが伝えられた ・友達のことが分かった	25%	38%	51%	67%

表3 表現することへの意識の変容

Q 英語やジェスチャーを使って、友達に話しかけてみようと思ったか。				
	1時目	2時目	3時目	4時目
とても思う	22%	41%	71%	88%
思う	45%	48%	29%	12%
あまり思わない	19%	11%	0%	0%
思わない	14%	0%	0%	0%

表4 児童の振り返りカードの記述の変容例

	1時目	2時目	3時目	4時目
	あこがれの職業	あこがれた理由	私の夢を聞いて	みんなの夢
A児	<u>C君が清掃員になりたいなんて初めて知った。サッカーをしているから意外。</u>	<u>C君は清掃員になって、お父さんの跡を継ぐなんてえらい。自分は考えたことがなかった。</u>	<u>C君は町をきれいにするだけでなく、ごみを減らすことも考えていた。見直した。</u>	<u>C君は清掃会社の跡を継ぐために、手伝いをして努力していた。夢がかなうように頑張ってほしい。</u>
B児	<u>Dさんのカウンセラーはびっくりだと思った。</u>	<u>1人1人理由があったからすごいと思った。もっといろいろな友達のことを知りたい。</u>	<u>E君の夢は大統領。みんなをまとめたいと言っていたので、素晴らしいと思った。</u>	<u>F君の夢はお笑い芸人。理由を聞いていいなと思った。みんなが笑ってくれると私も嬉しい。</u>

このような活動をきっかけに、仲のよい友達との関わりを更に深めたり、新しい友達との関わりを生みだしたりしていった。

児童の振り返りカードの記述を見てみると、A児はC児のことについて単元を通して記述し、B児は複数の友達についての記述をしている。どちらも友達の気付きについて表面的なことから内面的なことへと記述の内容が変化している。今まで友達について知っていると思っていたことが、「実際に聞いてみたら違っていた。」という新たな一面を知ることによって児童の心が動きだし、知ることへの関心を高めていったためだと考える(前頁表4)。

このように、友達について次第に内面に迫る内容を段階的に仕組んだことで、もっと友達のことを知ろうと心が動き、知ることへの関心を徐々に高めたと考える(表5)。そして、人を「知る」という新しい楽しさを見いだすことができるようになってきた。

表5 知ることへの意識の変容

Q 友達のことについて、もっと知りたいと思ったか。	1時目	2時目	3時目	4時目
とても思う	19%	64%	80%	90%
思う	64%	25%	20%	10%
あまり思わない	8%	8%	0%	0%
思わない	9%	3%	0%	0%

(ウ) 自分のことを表現する自信と相手を知ることへの関心のあい高まりについて

関わる必然性のある活動を仕組めば、自らの気持ちに支えられた関わりが生まれる。そのような関わりの中で友達のこと知ったり、自分にできる表現で自分のことを伝えたりしていくうちに、相手への関心と自分への自信が関連して高まり、人との関わり楽しさを見いだすと考えた。

検証授業①(11月実施)では、聞くことによって、言語・非言語表現の有効性を感じる活動をあまり行わないまま、児童同士のインタビューなど、伝えることが中心となる活動を早い段階から仕組んだため、表現に自信がもてず、積極的に活動することができない児童が出てきた。そのため、図2のG児のように関心と自信があい高まらなかった傾向の児童が42%(13名)いた。このような傾向の児童の中には、友達との関わり楽しさを見いだすことができなかった児童が含まれていた(表6)。

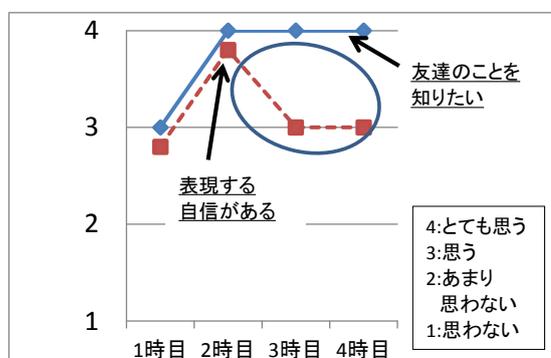


図2 G児の自己評価の変化

表6 検証授業①後のアンケート結果

Q 友達と関わることは楽しかったか。(31人)			
とても思う	思う	あまり思わない	思わない
21人	5人	5人	0人

そこで、検証授業②(1月実施)では、表現することへの自信を高める活動の仕組み方を聞くことを十分に行う活動から伝えることが中心となる活動へと段階的に高めていくように修正した(図3)。そして、互いのことを受け止め合うには、英語だけではなく、ジェスチャーや表情などの非言語も大事だということを、単元の初めに十分感じさせられることができるようにした。そのように活動の適切な設定を行ったところ、相手を知ることへの関心と自分を表現する自信をあい高めていき、クラス全体の93%(28名)がそのような傾向にあった(次頁図4)。関わりの中で、友達についての新しい発見や気

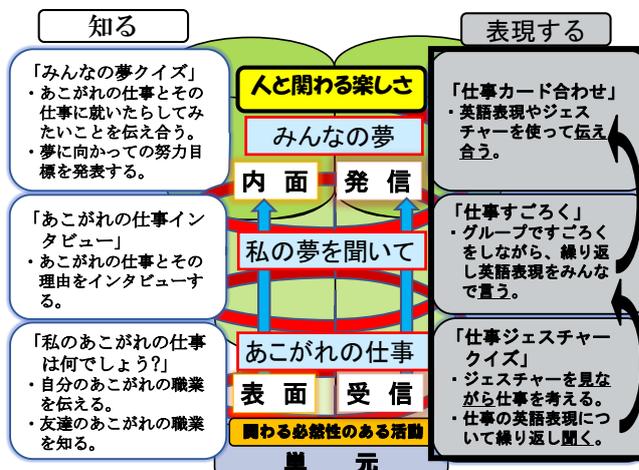


図3 検証授業②の単元の構想図

93%(28名)がそのような傾向にあった(次頁図4)。関わりの中で、友達についての新しい発見や気

付があると、もっと他のことも知りたくなる、そうすると、それを伝え合うための表現を広げたいくなるという心の動きが表れた結果、自分の考えを表現する自信と相手を知ることへの関心があい高まったのではないだろうか。その結果、多くの児童が友達との関わりの楽しさを見いだしてきた(表7)。関心と自信という人と関わる上での心の動きに大きく作用する2つの気持ちを相互に関連させるような内容を仕組んでいった結果だと考える。

(エ) 抽出児(I児)の変容について

I児は、人と関わるのが苦手で、自分の思いを言葉や行動で表現することがあまりない。また、何の活動をするときにも、自信がないときには、「恥ずかしい」「間違ったらどうしよう」という気持ちが影響し、自分から活動をしようとしなない。授業の始めは友達の周りを動くだけで、友達から話しかけられると関わる様子であった。声を掛けられても関わるのが恥ずかしくて友達を避けることもあった。

a 活動意欲を高めさせるための授業前における教師の支援

検証授業①(1月実施)の3時目から、授業の前に、前時に友達の質問に答えられたことや友達との関わりの中で友達の意外なことを知って、それを楽しいと感じていたことなどを想起させた。それによって、自信の成功体験を意識させ、本時の活動への意欲を高めさせた。I児は自分に使える表現を用いながら活動したり、前時に関心をもった児童へ関わったりした。また、授業の導入でも、I児が友達からの質問の意味を理解して自分のことを伝えられた点を取り上げて紹介した。すると、友達の前で褒めてもらったことで喜びを感じたのか、笑顔で授業に臨むようになり、より意欲的に活動するようになった。

b 児童が安心して関わるができるための教師の支援

まず、I児と共に発話したり、ジェスチャーを使うとよいというアドバイスをしたりして、表現することへの自信を高める機会をつくった。I児は徐々に言語・非言語に慣れ親しんでいき、一人でもできるという自信をもった。そこで、I児に友達との関わりを促したり、I児に関心をもっている友達がI児と関わる場をつくったりした。I児は、恥ずかしがりながらも自分を表現することで、友達とコミュニケーションを図ることができるようになってきた。関わりを積み重ねていくことによって、I児の態度が変化し、自分から友達に声を掛けたり、友達から声を掛けられても恥ずかしがることなく顔を見てコミュニケーションを図るようになってきたりしてきた。

c 振り返りの中での認め合い

活動の振り返りの場では、互いのよさ、友達についての新しい発見や活動の感想などを発表し合わせ、情報を共有させた。この中で、I児が積極的に友達に関わるようになってきたことを、みんなの前でほめた児童がいた。友達が自分について発表してくれたことでI児はとても喜んでいて。それだけではなく、「また発表されるように頑張る」と次時への意欲を高め、更に積極的に友達に関わるようになった。また、I児も認め合いの中で、友達の表現のよさを紹介するなど、相手を受け容れて自分の思いを発表するようになってきた。I児に認められた児童は、外国語活動の時間を越えて日常の生活の場でもI児のことを意識して話し掛けるようになり、互いの関わりを深めていった。

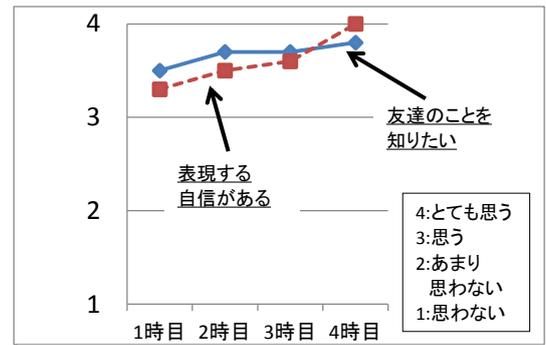


図4 自己評価の平均の変化

表7 検証授業②後のアンケートの結果

Q 友達と関わることは楽しかったか。(31人)			
とても思う	思う	あまり思わない	思わない
26人	5人	0人	0人

上記 a, b, c のような, I 児の様子に沿った手立てを取り入れ, 活動に向かわせたことで, 知ることにへの関心と表現することへの自信をあい高めていった(表 8)。それによって, いろいろな方法で伝えられるという気持ちを強くして友達に関わり出し, また, 関

表 8 I 児の自己評価

知る	検証①(11月実施)				検証②(1月実施)			
	授業1	授業2	授業3	授業4	授業1	授業2	授業3	授業4
友達の思いについて、もっと知りたいと思いましたか	×	△	○	◎	◎	○	◎	◎
英語やジェスチャーを使って、もっと友達に話し掛けたいと思いましたか	×	△	△	○	△	◎	◎	◎

とても思う:◎ 思う:○ あまり思わない:△ 思わない:×

わりの中で「恥ずかしい」という気持ちよりも「知りたい」という気持ちを強めていった。また, 友達とコミュニケーションを図る中で, 自分のことを教師や友達に受け容れてもらったという安心感や, 活動の中で自分のことが言えたという達成感が I 児の心を動かし, I 児は仲のよい友達だけではなく, ふだん遊ぶことのない友達や恥ずかしくて話し掛けることができなかつた友達などへと関わり対象を広げていった。

このように, I 児に合った手立てを取り入れたことで, 児童の中で自信と関心があい高まり, 人との関わる楽しさを見だし, 友達との関わりを広げていったと考える(表 9)。

表 9 I 児の振り返りカードの記述

	検証①				検証②			
	授業1	授業2	授業3	授業4	授業1	授業2	授業3	授業4
知る	友だちのいろいろなことを知った。	J君のことをもっと知りたくなった。	いつも話さない友達が話に来てくれた。嬉しかった。	Kちゃんが僕の話をよく聞いてくれた。 これからは、もっと友だちの話を知りたい。	L君は料理人。陰で努力していると思う。	Mくんの夢のお笑い芸人になれるよう頑張っている。	Nちゃんが話し掛けてくれた。うれしかった。	Oくんがたくさんの友だちに励ましの手紙を書いていた。みならいたい。
表現する	ちゃんと話を聞いた。	英語が分かった。	J君に質問が伝わった。前より英語が言えるようになった。	Kちゃんが僕のことをみんなに発表してくれた。嬉しかった。また発表されるように頑張る。	自分から話し掛けた。	英語もジェスチャーも使えてよかった。	英語を伝えるのがどんなに難しかった。今度から自分から話し掛けてみたい。	今日はみんなの前で自分のことが言えた。いつも言えないのに。うれしかった。もっと言えるようになりたい。

~~~~~ 関心の高まり  
..... 自信の高まり

イ 単元を積み重ねての変容と考察

このような単元を仕組み, 積み重ねたことで, 児童は, 外国語活動で見いだす楽しさを多様なものにしていった。検証授業(11月, 1月実施)を行う前までは, 「ゲームで勝つこと」「競争すること」「指示を聞いて上手に作品を作ること」など, 児童の見いだす楽しさはその場だけで終わってしまうものが多かった。それは活動の中で「人」という視点に重点を置いていなかったためだと考える。しかし, 検証授業(11月, 1月実施)後は, 外国語活動で見いだす楽しさが相手意識をもったものになってきた。

表 10 児童が見いだした楽しさ

| Q 外国語活動で楽しかったことを書いてください。 | 児童の記述内容例                |                       | 検証① | 検証② |
|--------------------------|-------------------------|-----------------------|-----|-----|
|                          | 検証①                     | 検証②                   |     |     |
| 自分を表現する<br>楽しさ           | ・ 自分の将来の夢が伝えられてよかった     | ・ 友達の質問に答えられた         | 20% | 35% |
| 相手を知る<br>楽しさ             | ・ インタビューして友達のこといろいろ分かった | ・ ALTと話をし、いろいろ分かった    | 38% | 42% |
| 関わりが広がる<br>楽しさ           | ・ ふだん話さない友達と話せて楽しかった    | ・ いろいろな友達に話し掛けて仲よくなった | 35% | 54% |
| 互いを認め合う<br>楽しさ           | ・ 応援メッセージを伝え合えてうれしかった   | ・ 友達に頑張ると励まされた        | 9%  | 19% |

いつも友達(相手)を意識して活動する内容を仕組んだためだと考える。その結果, 検証授業後に行っ

たアンケートでは、「自分を表現する楽しさ」「相手を知る楽しさ」「関わりが広がる楽しさ」「互いを認め合う楽しさ」などについて記述する割合が徐々に増えている(前頁表 10)。また、検証授業①(11月実施)後のアンケートでは、関わりの楽しさを見いだすことができなかった(無回答)児童が9%(3名)いたが、その児童たちも検証授業②(1月実施)後のアンケートでは、「いろいろな人のことを知ることが楽しかった。これからも自分から話し掛けてみたい。」と記述していた。

児童は、「他のクラスの人のことも知りたい」「外国人に会ったら進んであいさつをしたい」と人の関わりを更に広げたいと気持ちを持ち始めている(資料 1)。今後も人との関わりを視点に置いた取り組みを積み重ねていけば、自ら周りの人と関わろうとする意欲や態度を育んでいくことにつながると考える。

- ・ 他のクラスの人のことも知りたい。授業のようなことを聞きたい。
- ・ 外国人に会ったら進んであいさつをしたい。
- ・ 外国人が困っていたら話し掛けたい。
- ・ 妹が通っている幼稚園に、外国人の女の子がいる。機会があったら話し掛けてみたい。
- ・ スーパーで会った外国人に話し掛けた。どきどきしたけど、楽しかった。

資料 1 検証授業②後の児童のアンケート

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本研究を通して、外国語活動において、自ら周りの人と関わろうとする意欲や態度を育てるために、単元を通して、友達と関わる必然性のある活動を設定し、相手を知ることへの関心と自分を表現する自信を高めるという手立てを取り入れた。これにより、次のようなことが明らかになった。

- ・ 友達と関わる必然性のある活動の中に、「人」という視点をもった内容を仕組んだことで、児童は相手意識をもってコミュニケーションを図るようになった。活動の中で、相手に分かりやすく伝えようと工夫したり、相手の伝えようとしていることを理解しようとしたりする姿が多くみられるようになった。また、毎時間の活動の終わりに認め合いをさせることで、互いのよさに気づき、それが友達との関わりを深めることにもつながった。
- ・ 相手を知ることへの関心と自分を表現する自信を段階的に高め、それらが相互に関連するような単元構成にしたことで、児童の関心と自信があい高まった。児童は、友達について新しい発見や気づきがあると、もっと他のことも知りたいという思いをもち、それに伴って伝え合うための表現を広げていった。

このような活動によって、児童は外国語活動を通して見いだされる楽しさを多様にしていった。

### (2) 今後の課題

- ・ 知ることへの関心と自分を表現する自信を段階的に高める活動内容の検討
- ・ 振り返りの中での認め合いの工夫

### 《引用文献》

- 1) 吉村 峰子編著 『英語で広がる私たちの世界』 2001年3月 金の星社 p.1
- 2)3) 金森 強著 『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣』 2011年6月 成美堂 pp.23-191

### 《参考文献》

- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 平成20年8月
- ・ 岡 秀夫編著 『小学校英語教育の進め方』 2007年 成美堂